

シニアワークプログラム

高齢求職者を支援する「緑地管理」技能講習会を実施しています。9年目の今年は小千谷、見附でも開催し、3会場で延べ66人が受講されました。長岡会場の矢島健太郎さんは「充実した講習会でこれからの生活や人生に活かしていきたい。」と喜んでおられました。



見附会場にて

市民講座 庭木の冬囲い教室

縄の結び方から山組み、松の雪吊りなどの実技指導を行いました。参加された方は「さっそく明日にでも今日の講習会で教わったことを自宅の冬囲いの作業に活用したい」と話されていました。その他、基礎知識 剪定教室なども開催しました。



冬囲い講習

視察研修に参加して

10月8～9日の二日間、福島方面の視察研修に参加しました。最初の目的地「片岡鶴太郎美術庭園」では、雨に濡れた石畳を通り、園路を進むと、幹巻帯もそのまま残っている大きなモミジが景をまとめ、開館して4年との事ですが、下草と景石がしっかりと溶け込み、モダンな印象を受ける和風庭園でした。私の世代ではひょうきん族のイメージが強い鶴太郎氏ですが、絵画や陶芸などの作品も展示され、氏の多才ぶりに感嘆しました。続いて東北の名庭「浄楽園」を見学。

約25,000㎡もある敷地に地元の方が資財を投じて室町時代の池泉廻遊式庭園を模し作庭した、ずいぶん立派な純日本庭園です。宿泊先の岳温泉「松溪苑」は庭園の宿の看板とおり、樹齢300年のアカマツを擁し、庭園を囲む様に建物が並び、部屋から風呂、宴会場へと移動するたびに道に迷う方が多数出現しました。夏にリニューアルされたばかりの大檜風呂にて、日頃の疲れを癒し、安達太良山麓の夜は更けていきました。それぞれの研修で得たものを、今後の仕事に活かしていければと思います。また、なによりも参加した方々との親睦が深まったことが一番の収穫でした。(佐藤)



浄楽園



片岡鶴太郎美術庭園



里山の再生を願って...

ブナと桜の苗木を植樹



山古志小児童ら



(松木)



ブナ苗木の植樹

山古志に再びブナの森を蘇らせようと十一月九日、山古志小学校五、六年生の児童二十人と県職員や治山ボランティアの皆さん三十五人が、地震で崩れた保安林にブナの苗木二百七十本を植えました。この苗木は種から育成したものを、春から学校で育てていたものです。児童は森の大切さや、苗の植え方の説明を聞いた後二十センチほどに成長した苗木を一本一本丁寧に植え付けました。「早く大きくなって欲しい。たくさん木を植えて、元どおりになるようにがんばりたいです。」と作業に励んでいました。苗木が育ち、もとのブナの森に戻るには五十年もかかると言われていますが、失われた緑の再生に向けて生きの長い活動を誓いました。

かけがえのない故郷構築を願って

“07 初夏中越震災 みどり復興ワークキャンプ in 山古志”を6月23～24日に開催し、全国から、復興を願う仲間たち約40人が山古志に集まりました。地区民と協働し里山の復活と山の暮らし再生を願う“山古志フィールドミュージアム構想”の実践について検討しました。また、被災地域の栃尾から山古志・小千谷・川口にかけて、失われた山肌を森を取り戻す“縄文ブナ街道物語”がスタート。さっそく山古志で15センチほどに成長したブナ苗を採取。この苗を育成し、全国に呼びかけ、木を植え育てる地域運動を展開し、人的交流により中山間地域の活性化を目指す試みです。



みどりの復興シンポ開催さる 11月10.11日 森からの発想 造る・感じる・育む



復興を願うワークキャンプとシンポジウムを山古志産業会館と長岡造形大学を会場に開催しました。復興プログラムの活動も3年目に入り、ランドスケープの面から発信してきた、暮らしと自然の復興に向けた提案も、具体的な行動が始まっています。シンポジウムは里山の機能や景観を再生するブナの森作りと、人的交流により地域活性化が期待できる環境学習塾の創設をテーマとし、プロジェクトのあり方や進め方について著名なゲストをお招きし開催されました。

- ・ブナの街道や、ブナの森...。やっぱり主役は里山です。(秋山ワークキャンプ代表)
- ・日本人は農の心をいつの間にか忘れてしまった。それぞれの地域に想いを込めて、そっと支えて行こう。(鈴木実行委員長)

詳しくはホームページ (midori-nagaoka.net) をご覧ください。



緑を育て豊かな地域に

(社) 長岡市公園緑地協会
理事長 鈴木重忠

近年、もはや誰の目からも地球環境の異常が認識され、すでに人事では大変な事態に至っています。にもかかわらず、それぞれの国や個人のレベルこそあれ、利害むき出しの主張がまかり通っているのも事実です。愚かきものよ、汝の名は人間なり。悲しいことに人間は地球生命体の一部でしかなく、互いに共存しなければ生きていけないという事実を背を向け、全ての生命体の頂点に立つことを思い上がり、支配意欲を優先に立たせ、目先の利便だけを優先してきた結果がこの有様です。このままではこの数十年の間に、地球生命維持装置の臨界点を越え、一気に絶滅へ急加速するとは眼に見えています。この危機を感じないわけにはいきません。我々の未来を、漆黒の闇に葬ってはなりません。

今こそ、多くのみどりの集団が、地域と連携し、先頭に立って大きなつねりをつくる時だと考えます。それには地域の皆さんが一体となって進むことが必要で、高邁な理念に裏付けられた運動が必要で、そのひとつが一連のみどり復興アクションプログラムです。今秋期に開催したみどり復興ワークキャンプに於いて、みんなで採取したブナの実生苗をしっかりと育て、来秋にはそのつねりを縄文ブナ街道プロジェクトとして全国に発信し、山から里、里から海へそれぞれの地域の皆さんと協働しながら、みどりの復興をキーワードとした、環境保全活動に汗を流そうではありませんか。具体的には、油土の地で農を基軸とした、ムラの再生を目指す活動に着手しましょう。まち中にも、もつみどりを増やさないとの間に合いません。村々の鎮守の森や屋敷林、はさ木や古木など貴重な財産も守らねばなりません。海の汚れは、我々人間の罪の深さに比例しています。太古の昔より、限らない恩恵にあずかったみどり。良質なみどりは、地域の貴重な財産です。そもそも、自然を守り育てねばならぬという掛け声だけで、その実態は、短絡的とも思える管理費の縮減であったり、落ち葉や病害虫の苦情を、声高に訴える無責任な市民力であったり、拳の果てには、植物が無ければ管理しなくても済むという考えが堂々とまかり通っている。今日の現況にこそメスを入れ、未来に向かって、希望の光がさす豊かな環境づくりに力を合わせようではありませんか。